

〈伝説の学生運動〉を3時間20分に圧縮した長編ドキュメンタリー

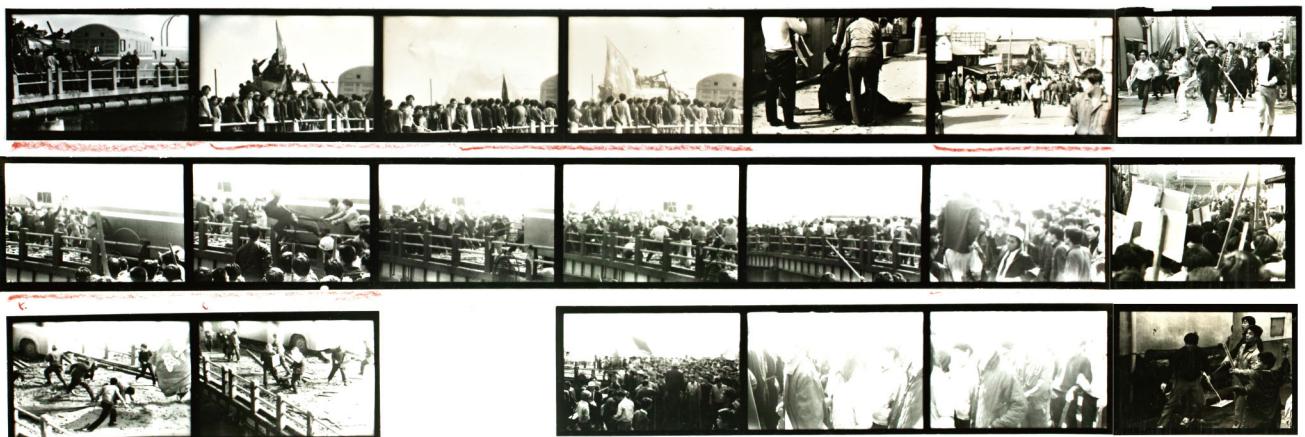


Foto 3号 65枚
II-2 103×106
II-4 203×145

代島治彦監督作品

存在の路上を
割り走り投げ
橋を渡れ
橋を渡れ
声をかぎりに
声をかぎりに

佐々木幹郎
詩集『死者の鞭』より

きみが Whiplash of the Dead

死んだあとで



もしもぼくが、

1967年

10月8日に

羽田・弁天橋で

死んだ

18歳の若者の

友だちだったと

したら、

どんな人生を
歩んだだろう。



『きみが死んだあとで』

(日本／2021年／200分(上巻:96分／下巻:104分)／DCP／5.1ch)

製作・監督・編集：代島治彦

撮影：加藤孝信／音楽：大友良英／写真：金山敏昭、北井一夫、渡辺峰／

整音・音響効果：滝澤修／カラーコレクション：佐藤健／字幕デザイン・宣伝美術：鈴木一誌、吉見友希／

制作：スコブル工房／配給：ソーラーライコ／宣伝：テレザ企画／製作：きみが死んだあとで製作委員会

1967年10月8日。佐藤栄作内閣総理大臣(当時)の南ベトナム訪問阻止を図った「三派全学連」を主体とする第一次羽田闘争は、その後過激化する学生運動の端緒となる事件だった。はじめてヘルメットやゲバ棒で武装した学生は羽田空港に通ずる弁天橋で機動隊と激突。そのなかで一人の若者が殺された。山崎博昭、18歳。機動隊に頭部を乱打されたためか、装甲車に轢かれたためか、死因は諸説あるが、彼の死は同世代の若者に大きな衝撃を与えた。

あれから約半世紀。亡くなった山崎博昭の高校の同級生たちや当時の運動の中心だった者たちは歳を重ね、山崎だけが18歳のまだ生き残った総勢14人が語り継ぐのは美しく輝く青春とその後の悔恨。闘争の勢いとその衰退も振り返りながら、さまざまな記憶と感情が交錯する。青春だけが武器だった、あの“異常に発熱した時代”は何だったのか。「きみの死」はまだ終わっていない。半世紀を経てもなお、その宿題は続いているのだ。



山崎建夫
山崎博昭の兄



佐々木幹郎
大手前高校同学年



岩脇正人
大手前高校同学年



三田誠広
大手前高校同学年



岡 龍二
大手前高校同学年



北本修二
大手前高校同学年／
10・8羽田闘争参加者



向 千衣子
大手前高校同学年／
10・8羽田闘争参加者



黒瀬 準
大手前高校同学年／
10・8羽田闘争参加者



島元恵子
大手前高校同学年／
10・8羽田闘争参加者



赤松英一
大手前高校先輩／
元京大中核派リーダー



山本義隆
大手前高校先輩／
元東大全共闘代表



田谷幸雄
10・8羽田闘争参加者



島元健作
10・8羽田闘争参加者



水戸喜世子
10・8羽田救援会／
救援連絡センター事務局

歴史と記憶のはざま
浮かび上がる
生き残った者の
ナラティブ(語り)
織り上げた
長大なタペストリー

上・下巻合わせて3時間20分の大長編にまとめきった代島治彦監督は、『三里塚に生きる』『三里塚のイカロス』に統いて“異常に発熱した時代”に三度組み合った。インタビュー中心のストイックな構成は、“歴史と記憶のはざま”を浮き彫りにし、ナラティブ(語り)によって織り上げられたタペストリーのようだ。音楽・大友良英が作曲したフリージャズをベースにしたアーナーキーな主題曲が重なり、時代の狂気と美しい記憶が混然一体となって押し寄せてくる。代島も大友も学生運動が熱を失った後の「しらけ世代」。権力と闘い、革命を叫んだ「全共闘世代」への愛憎を忍ばせながら、彼らの歴史的功罪を問う重厚なドキュメンタリーが誕生した。

2021年4月よりロードショー

全国観賞券2,000円(税込)絶賛発売中

一般 2,500円／シニア・大学生 2,000円／ユーロスペース会員 1,900円



ユーロスペース
EUROSPACE

渋谷・文化村交差点左折

TEL: 03-3461-0211

www.eurospace.co.jp

